

平成26年度 東洋学研究情報センター共同研究課題年次実績報告書

1. 研究課題名

中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究

泉涌寺流を中心とした宋代仏教の相対化の試み

2. 申請研究者

(氏名) 西谷功 宗教法人 泉涌寺

3. 申請者以外の共同研究者

(氏名) 板倉聖哲 東京大学東洋文化研究所 教授
中尾良信 花園大学 教授
藤岡穰 大阪大学 教授
稲本泰生 京都大学 准教授
谷口耕生 奈良国立博物館 保存修理指導室長
塚本麿充 東京国立博物館 研究員
高橋真作 鎌倉国宝館 学芸員
大塚紀弘 法政大学 講師

4. 研究期間

平成26年4月1日から平成28年3月31日(2年間)

5. 課題の概要(600字程度)

本研究は第一に「中国絵画所在情報データベース」を援用して調査を行い、その成果により「中国絵画デジタル・アーカイブ・プロジェクト」の推進を図ることを課題とする。第二に、中世寺院社会において入宋僧が請来した宋代仏教の思想や儀礼文化、美術作例の受容過程を、従来の宗派史観や顕密仏教論から開放し、東アジア仏教的視角から再解釈を行い、関連資料を蒐集することで、鎌倉仏教の新たな宗教史的・美術史的・文化史的意義の統合的構築を試みる。

その基点寺院を入宋僧・俊苾開山の泉涌寺(京都市)とする。同寺は近年発見の『南山北義見聞私記』(同寺蔵)により、日本の禅宗寺院と同様に、南宋仏教の寺院制度、出家生活の作法・諸儀礼などを興行し、また儀礼空間において釈迦三尊・羅漢・祖師などの仏像仏画の奉安例が明らかとなっている。本発見は(1)「宋代仏教＝禅仏教」イメージからの脱却とその相対化、(2)日宋間における同主題の美術作例流行の要因を「儀礼興行」という新視角による再解釈を可能とし、(3)泉涌寺僧や同寺参学の禅僧・律僧・浄土僧・顕密僧に対する擬似的宋代仏教の受容とその展開、を想定可能にするもので、従来の中世寺院社会における宋代仏教文化の受容や影響を抜本的に見直す最新の研究視座に位置付けられる。

そこで、これらの視座を基点に、泉涌寺や関連寺院、各博物館所蔵の聖教・美術作例の調査を行い資料蒐集することで、宋元・鎌倉仏教文化の再解釈を行い、従来の史観から解放された仏教学・仏教史・美術史の立場から中世寺院社会における宋代仏教文化受容の統合的研究を行うことを課題とする。

6. 今年度の研究実施状況(400字程度)

- (1) 初年度は、共同研究者や関連領域の研究者・大学院生を招聘し、本研究の趣旨を述べた上で、泉涌寺所蔵の仏画・絵画、典籍(版本)の学際的調査を実施した。
- (2) 宋代仏画の作例・所蔵先を把握するために、東洋文化研究所所蔵の調査カードを調査し、その成果を踏まえ、寺院・博物館・個人・図書館所蔵の釈迦三尊像、涅槃図、羅漢図、肖像画などの仏画、宋音経典や年中行事資料、法会次第(儀礼)書などの調査、資料収集を行った。
- (3) (1)(2)の調査成果を踏まえ、泉涌寺蔵の儀礼書『南山北義見聞私記』の研究輪読会を開催し、検討を加えた。
- (4) 本研究の中間報告として、3月に東京大学でシンポジウムを開催した。

7. 今年度の研究成果の概要(400字程度)

本年度の成果として、三十数点におよぶ泉涌寺所蔵、二十数点の寺院・博物館・個人所蔵の仏画、典籍(版本を含む)の調査を行い、美術史・歴史学・仏教学・儀礼史などの多角的な視点で検討を加えることで、鎌倉時代における宋代仏教文化受容の具体的な事例を抽出することに成功し、さらには図様の再解釈、儀礼空間での機能(懸用・読誦)を再考できた。こうした成果の一端は、泉涌寺宝物館での展示や、谷口「道宣律師像・元照律師像・俊苾律師像」、西谷「文物からみた日中僧俗ネットワーク」(ともに『東アジアのなかの日本美術』、小学館)、同「東山泉涌律寺図」(『京を描く』展、作品解説)として公にし、板倉「梁楷「出山釈迦図」をめぐる諸問題」(浙江大学シンポジウム「宋画国際学術会議」)、高橋「鎌倉・光明寺蔵「十八羅漢及び南山大師像」について」、西谷「中世寺院における宋代仏教受容の諸相」、同「泉涌寺旧蔵「涅槃変相図」とその儀礼の復元的考察」(ともに同研究会シンポジウム)と題して口頭報告を行った。

8-1. 共同利用・共同研究活動の状況

(1) 共同研究のための研究会、シンポジウム等の実施状況

| 開催期間 | 形態(区分) | 対象 | 研究会等名称 | 概要 | 参加人数 |
|----------|---------|----|--------------------------------|--------------------------|------|
| H26.7.28 | ワークショップ | 国内 | 研究会「中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究」 | 泉涌寺で開催し、研究報告および質疑応答 | 17名 |
| H27.3.15 | シンポジウム | 国内 | シンポジウム「中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究」 | 東京大学内で開催し、3名の研究成果報告と質疑応答 | 30名 |

(2) 上記(1)の研究会、シンポジウム等の参加状況

| 区分 | 平成26年度 | | | | | | | |
|---------------|--------|------|------------------|------|------|------------------|------|------|
| | 機関数 | 受入人数 | | | 延べ人数 | | | 大学院生 |
| | | 外国人 | 若手研究者 (35歳以下) | 大学院生 | 外国人 | 若手研究者 (35歳以下) | 大学院生 | |
| 東京大学内 | 2 | 7 | | 4 | 8 | | 4 | |
| | | | | (4) | | | (4) | |
| 国立大学 | 3 | 5 | 2 | 2 | 8 | 3 | 3 | |
| | | (1) | (1) | (1) | (2) | (2) | (2) | |
| 公立大学 | 1 | 1 | | | 1 | | | |
| | | (1) | | | (1) | | | |
| 私立大学 | 5 | 5 | | | 5 | | | |
| | | (1) | | | (1) | | | |
| 大学共同利用機関法人 | 1 | 1 | | | 1 | | | |
| 独立行政法人等公的研究機関 | 9 | 16 | 4 | 4 | 20 | 4 | | |
| | | (8) | (1) | (1) | (9) | (1) | | |
| 民間機関 | 1 | 1 | | | 2 | | | |
| 外国機関 | | | | | | | | |
| その他 | | 2 | | | 2 | | | |
| 計 | 22 | 38 | 0 | 6 | 47 | 7 | 7 | |
| | | (11) | (0) | (2) | (13) | (0) | (6) | |

(3) 共同利用・共同研究に供する施設・設備及び資料等の利用状況等

○データベースの作成・活用・利用・公開状況

| | データベース名 | 蓄積情報の概要 | 公開方法 | 蓄積量／利用・提供状況 | |
|---|-----------------------------|---------|------|-------------|------------|
| | | | | 蓄積量 | 利用(アクセス)件数 |
| 1 | 東洋文化研究所 「中国絵画所在情報データベース」 | | | | |

※カウントできないものについては欄外にその理由を記入して下さい。

(4) 独創的・先端的な学術研究を推進する特色ある共同研究活動

本研究は、美術史、歴史学、仏教学でそれぞれに蓄積された「宋代仏教」に関する学術成果を、それらの事象を集積した「寺院」という場から統合的に捉え直すことを目的としている。こうした視座のもとで、研究領域を異にする専門家を一堂に会した研究会・シンポジウムの開催、さらには調査を推進することで、各分野で定説化する事象に対し、再解釈、新視点の提示を可能にした。

(5) 国公私を通じた研究者の参加を促進するための取組状況

本研究では、すでに、国立・私立大学、国立・公立博物館、民間研究機関所属の研究者で構成されているが、研究推進上、構成員がもつさらなる人的ネットワークにより、作品の公的所蔵機関(大学・博物館)、諸寺院、個人などとの多彩な交流をもつに至った。こうしたネットワークの構築と連動して、公開研究会を開催し、関心を持つ専門家との交流もはかる機会を設けている。

(6) 共同利用・共同研究を通じた特色ある人材育成の取組

本研究は、美術品・聖教・歴史資料などの「モノ」を基礎資料とするため、調査を重視する。それぞれの分野での調査方法は大きく異なるが、それらを同時に行うことで、他分野の調査方法の理解、習得することを推進するものとする。こうした調査には、関心を持つ若手研究者や大学院生に積極的に参加してもらい、学際的研究に対応できる人材の育成を目指している。

(7) 関連分野発展への取組(大型プロジェクトの発案・運営、ネットワークの構築 等)

すでに共同研究者の大塚「日本中世前期における版本文化の基礎的研究」(日本学術振興会科学研究費補助金、若手研究B)と連動した調査を行っており、調査成果を踏まえた展示を博物館施設等で予定している。また、共同研究者のネットワークにより、博物館・寺院・個人などの多様なネットワーク構築に成功しており、さらなる研究視座からの「宋代仏教」の見直しを図る研究プロジェクトへの展開が期待できる。

8-2. 共同利用・共同研究による研究成果

(1) 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

| 区分 | 平成26年度 | |
|------------------|--------|-----|
| 論文数 | | |
| うち国際学術誌に掲載された論文数 | 2 | () |

※下段の()内には、東文研以外の研究者による成果(内数)を記載。